
カシューナッツはお好きでしょうか？

たこき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カシユーナッツはお好きでしょうか？

【Nコード】

N6779X

【作者名】

たこき

【あらすじ】

アイドルを題材とした物語です。

アイドルをプロデュースする老け顔の男、『ふけさん』

アイドルを目指す少女、『カエデ』

新人アイドル、『ハルカ』

アイドルに恋する警察官、『川島』

そして、謎の『アイドル研究家』

この5人がおりなす恋物語……にする予定です。

章ごとに主人公が変わる形式で書いています。
ぜひ、読んでやってください。

プロローグ

プロローグ

私には、変な癖がある。

『こうしたら、どうなるだろう？』

と変なことを思いつき、それを実行したくなる。実行したくなるだけならまだいいのだが、どうやら私にはそのどうでもいい思い付きを実現させてしまう、驚異的な行動力も備わっているらしかった。

普段は全く行動力がなく、ダメな私だが、変な思い付きを実現させることにに関してだけ、何故かものすごい行動力を発揮するのだ。その行動力のせいで、四、五回警察のご厄介になったことがあるほどだ。ご厄介といっても、痴漢をしたり、暴力行為を行ったりはしていない。断じてしていない。ただ、少し迷惑な行為をしただけ、ただそれだけなのに、無能な警察どもは私のことを変人扱いした。許せない！ 国家の犬め！ 税金返せ！ ……これ以上無意味な発狂はやめて、物語を進めることにしましょう。

さぁお楽しみ、これから始まる物語はきつと、あなたの脳髓に一滴として残らないでしょう。読んだあと「読まなきゃよかったあ！！ 時間返せ！！」と後悔することでしょう。えてして、人生とはそういうものです。よく、「無駄なことにこそ意味があるんだ」という詭弁を耳にしますが、そんなことはありません。無駄なものは無駄です。意味などありません。意味など求めている時点で負けです。……ん？ 話が長いって？ わかりました、でわ、今度こそ話を進めましょう。どうぞ。

ふけさん その1（前書き）

タイトルの人物がその章の主人公となります。章ごとに主人公が変わりますので、少し読みにくいかも知れませんが、ご了承ください。

ふけさん その1

今日もまた、ぶらりとオフィス街を歩いていると、ある建物に目がとまった。その建物はいわゆる『貸しスタジオ』として使われている建物であった。私は何の気なしにその建物に入った。

今年で二十八になる、超老け顔の私。昔から老け顔で、中二の時についたあだ名が『ふけさん』な私。見た感じ、五十歳くらいのおっさんにしか見えない私。……そんな私が勝手に建物に入って、呼び止められないわけがない。

「どちら様ですか？」

当然のように私は呼び止められた。

「社長です」

私は堂々と、歯切れよく答えた。今までの経験から言って、こういう場合は堂々としていたほうがかえって怪しまれないものだ。

「じゃ、社長ですか!？」

「うむ。そうだよ。何だね、ここ人間は社長の顔もわからないのかね？」

私は相手の言葉にかぶせる様に、少し威圧的な態度で言った。

「そ、そんなことはありません。ちゃんと知っていますよ。まさかいらっしやるとは思っていなかったの。来る前に連絡していただければよかったのに。ささ、どうぞ。オーディション会場はこちら

になります」

完全に私を社長だと思い込んだ若い男性は少し早口でそう言うと、『オーディション会場』なるところに私を案内してくれた。

はて？ オーディションとは？ いったい何の？

私はそんなことを考えながら若い男性の後に続いてオーディション会場へと足を踏み入れた。

ふけさん その2

オーディション会場には十人ほどのスタッフらしき大人達と、おそらくオーディションを受けに来たであろう若い二十人ほどの少女達がいた。

「次、エントリーナンバー十二番の子」

「栗山カエデ、18歳です。よろしくお願いします!」

「君はどんなアイドルになりたいの?」

「はい! 私は歌やダンスのレッスンをがんばって、一生懸命努力して、歌って踊れる一流アイドルになりたいです!」

「へえー、そう。じゃあ、今までどんな努力をしてきたの?」

「はい、アイドルになるために、毎日四時間のダンスや歌のレッスンをしてきました」

「どうやら審査の真っ最中らしく、まだ垢抜けていないアイドルの卵が必死になって自己主張をしていた。」

「おせーよおまえ!」

「すいません」

私のことを案内してくれた若い男性が、おそらくこの中で一番偉

いと思われるハゲ頭の男性のもとへと向かい、何やら話し始めた。

「……で、ちゃんと準備できたのか？」

「いえ、すいません。まだです」

「はあ？ お前なめてんの？」

ハゲさんは相当イラついているらしく、言葉の抑揚が暴力的だった。ハゲさんのイラついた雰囲気狭い会場に充満していて、若いアイドルの卵達はとても息苦しそうだった。かわいそうに。

「それが、社長が来たので、それどころじゃなかったんです」

「え！？ 社長？ うそ？ どこにいるの？」

ハゲさんはしきりにキョロキョロしていた。……マズイ、さすがにハゲさんくらい偉い人であれば本当の社長の顔ぐらい知っているだろう。ばれる前に逃げようか……。私がそんなことを考えていると

「あちらです」

と、案内してくれた若い男性に指を刺された。マズイ、非常にマズイ……。

「そうです。私が社長です。オーディションは順調ですか？」

思わず、そんな言葉が口から出てきた。

「……………」

ハゲさんが黙り込んだ。私のことを疑っているのだろうか？　くそ、万事休すか……。私がまた警察の厄介になる覚悟を決めたとき、ハゲさんが勢いよく近づいてきた。

「いやー、社長お久しぶりです！　どうです？　今夜あたりまた呑みに行きましょうよ」

……おい！　ハゲさん、あんたそれでいいのか！？

「そうしたいのはやまやまなんだけど、もう帰らなくちゃいけないんだ」

私は自分がニセ社長であることがばれる前に退散しようと思い、話を早く切り上げようとした。四、五回警察のご厄介になった経験で学んだことは『深追いをしない』『腹八分目でやめる』ということだ。そう思った私が、帰ろうと方向転換をしようとしたとき、

「そうだ、社長から一言お願いしますよ」

とハゲさんに言われ、手を引かれ、まだあどけないアイドルの卵達の前に立たされ、スピーチをする羽目になった。

もう一度確認しておきますが、私は今年で二十八歳になる、少し老けた顔をした、ただの公務員です。全くの部外者です。

さて、何を言おうか……。私は黙ったままでは怪しまれると思い、苦心しながらも言葉を搜し、口を開いた。

ふけさん その3

「さっきの十二番の子。君はアイドル失格だね」

少し、キツめのトーンで、私は言葉を発した。十二番の少女は少し動揺した顔をしていたが、目は反抗的だった。

十二番の少女を槍玉に挙げたのは、ただ単に話の内容が思いつかなかったから。ただそれだけ。ごめんね、十二番の子。

「どうしてですか？ 一生懸命努力して、一流のアイドルになりたい。この気持ちのどこがいけないのですか？」

十二番の少女は臆することなく社長（ニセモノだけど）にたてついた。これは、若さがなせる技だなあ……。若いころは私にも変な自信があつて、周りの人の言葉なんか、素直に聞く気になれなかったもんなあ。うんうん……。ってかマズイ！ 予想以上に食いついてきた。どうにかこの子を落ち着かせないと……

「いいですか、アイドルというのは人に『憩い』を届ける仕事です。努力をするということは、無理をするということです。無理をしている人が、誰かに『憩い』を届けられますか？ 努力するのに夢中で、心に余裕のない人が、いったい何を伝えられというのでしょうか？」

テキトウです。私、今ものすごくテキトウなことを言っています。十二番のお嬢さん、これで引き下がってくださいませんか？

「……でも、毎日レッスンしないと歌もダンスも覚えられません。

うまくありません。へたくそなままじゃ評価してもらえません！
だから努力は必要だと思います。絶対に」

十二番の少女は「絶対に」と力強く語尾を結んだ。おいおい、最近の子はどんだけすごいんだよ。仮にも社長だよ？ 社長に対してこれだけ強気でモノを言えるなんて……。若さってコワイ。

「大切なのは、君が言う努力を何でもない日常に変えることだよ。一流のスポーツ選手ほど、努力をしていないと言う。それは、努力を隠したいからそう言っているわけじゃなくて、本当にそう思っているからなんだ。

つまり、何を言いたいかというのだね、他の人から見たらスゴイ努力しているように見えても、その人にとっては日常のことであり、努力をしているという自覚がないということなんだ。だから、余裕をもてる。無理をしていないから、一流のパフォーマンスを披露できる。

アイドルもそう。僕らが齒を磨くように、毎日四時間の激しいレッスンを平然とこなす。レッスンの後に『疲れたー』とか『自分は努力した』なんて思わない。だって毎日の食事と同じ、ただの日常の一部でしかないんだから。そういう心持ちで淡々と激しいレッスンをこなす。そして、心に余裕を持って、自身を表現する。それができて初めて、『一流のアイドル』になれるんだよ。

今の君は無理して努力して、心に余裕がないんじゃないかな？ それじゃ、ダメだよ。普通の人じゃ耐えられないような激しいレッスンを、涼しい顔で平然とこなす。それができて初めて、心に余裕が生まれ、人に『憩い』を届けることができるんだよ」

テキストウです。ああ、テキストウです。自分でもなに言っているかわかりましえーん。

「……………すいませんでした」

どうやら十二番の少女はあきらめてくれたようだった。ありがとう、君はきつと将来すばらしいアイドルになるよ。そのときは、影ながら応援するからね。それじゃ！

「でわ、みなさんさようなら。オーディションを続けてください」

私は自分がニセ社長であることがばれる前にそそくさと退散した。

ハルカ その1

『大切なのは、君が言う努力を何でもない日常に変えることだよ』

突如オーディション会場に現れた社長さんのこの言葉を聞いて、私は本気でアイドルを目指そうと思った。

最初は友達が「一緒にオーディションを受けてほしい」と泣いて頼んできたので、仕方ない気持ちでオーディションを受けに行った。テキストウに答えて、さっさと落選して帰ろうと思っていた。でも、突如現れた社長さんの言葉で、アイドルという職業に興味を持った。『憩いを届ける仕事』という言葉にグツときた。アイドルになりたいと思った。

「ハルカさん、スタンバイお願いします」

「あ、はい！」

あのとき、自分のオーディション番号が十五番で良かった。十二番よりもはやい番号だったら、きっと私はアイドル『カシユーナツ』のメンバーに選ばれなかったと思う。

そんなことを考えながら、私は眩いステージにつながる階段を、駆け上がった。

アイドル研究家 その1

アイドル『カシューナッツ』

つい最近デビューしたばかりの新米アイドルだ。デビュー曲は『カシューナッツ』は好きですか？』。オリコン初登場5位はなかなかの結果といえるだろう。所属はアイドルプロダクション『わっしよい』。

メンバーは、ハルカ、クミ、マリコの3人。いわゆる、“王道アイドル”といえる様な風貌や雰囲気を持った3人組みである。

しかし、歌やダンスのレベルは高く、そのパフォーマンスはショーと呼べるレベルにある。特にハルカは身長こそ低いが、ダンスのキレと歌唱力が秀でている。それに顔も愛嬌のある、誰にも親しまれるような顔をしている。

今後、大ブレイク間違いなしの注目アイドルであると太鼓判を押せる、数少ないアイドルであろう。

警察官川島 その1

「またお前か！ 人の迷惑を考えろ！」

これで7回目だ……。いったいこの男は何をしたいんだ！？ さっぱりわからん。

俺はこの町で有名な変人である”田中敬一”という男を再び捕らえた。この男、まだ28歳にもかかわらず、とても老けた顔をしている。そのため、交番内では「変なおじさん」と呼ばれている。

「離せ！ 国家の犬め！ コンチクショウ！！」

この男は今回、道行く人にいきなりジャンケンを仕掛けるといふ奇行をしていた。何が楽しくてそんなことするのかわからんが、苦情の電話が殺到したので、この町の交番で一番下っ端の俺が注意しにきたのだ。正確には行かされたのだ。いつもそう、酔っ払いつか不良の喧嘩とかさういった面倒くさいことは全て俺が処理する羽目になる……。ああ、はやく後輩こないかなあ。コキつかってやるのに。

「ほら！ いいかげんおとなしくしろ！ とりあえず交番に行くぞ」

俺は抵抗する変なおじさんを羽交い絞めにし、無理やり交番に連れて行くとした。そのとき、

「社長さん！」

俺は思わず腕の力を緩め、変なおじさんを放してしまった。俺の目の前にはあの、アイドル『カシューナッツ』のハルカちゃんがいるのだ！！ か、か、か、かわいい！！！！ かわいいすぎる……。

俺は思わずハルカちゃんに見惚れてしまった。

「社長さん、私、私ずっと、あなたにもう一度あいたかったんです……こんな街中で偶然あえるなんて、うれしいです」

はにかむ様に微笑むハルカちゃん。もう、かわいすぎです。俺の心臓はバクバクだった。

「待ってください！ 社長さん！！」

ハルカちゃんは艶のある髪をなびかせながら、俺の横を走り抜け、抜けた。そのとき、ほのかに漂うシャンプーの香りが鼻腔を通り抜け、俺はまるで夢の中にいるような浮遊感を味わった。ああ、なんていい香りなんだ……。俺は浮遊感を楽しみながら、走り去って行く彼女の後姿を見送った。

パタパタと揺らめくスカートから伸びる、白くて細い足。ギュッと抱きしめたら折れてしまうのではないかと思えるほど、華奢な背。そして、そんな彼女の目線の先には……変なおじさん？ はて？ ということだ？ そういえば「社長さん」ってハルカちゃんと言っていたような……。

俺は次々と浮かんでくる疑問をもてあましながら、美しい少女の背中を見送った。

ふけさん その4

「はぁー、はぁー……」

私は人気のない浜辺へと逃げ込み、警察が追って来ていないのを確認してから一息ついた。

「ふぁー、災難だった。くそ、あの警察毎回私のことを捕まえにきやがる！ 私はただ、町行く人にじゃんけんを仕掛けただけなのに、なんで警察に注意されなければいけないんだ！ コンチクショウ！……はぁ、疲れた」

私は浜辺に寝そべり、上空を見上げて休んだ。

ふぁぁぁ……少し寝るか。私がそう、思ったとき

「ララララ〜」

テトラポッドの向こう側から、謎の歌声が聞こえてきた。それは、心地よい波の音を掻き消すような、大きな歌声だった。

いったい誰だ！？ うるさくて眠れないじゃないか！ そう思った私は文句の一つでも言っただろうと思い、テトラポッドの向こう側を覗き込んだ。

「ルルルル〜」

そこには、一人の少女がいた。相手が強そうな男だったらどうしようかと思ったが、か弱そうな少女なら話は別だ。強気で文句を言

ってやるつ。そう思ったとき、ある考えが浮かんだ。

『この少女の歌声にあわせて、ばれないようにハモることができたら、おもしろそうだ』

そう思ってしまった。そして、一度そう思ってしまったら実行せずにはいられないのが私の性分だ。私は「ゴホン」と軽く喉を鳴らして、少女の歌声に合わせるように、自慢の美声を発した。

「ララララ〜」

「ララララ〜」

「ルルルル〜」

「ルルルル〜」

ふふふ、さすが私だ。あの少女、全然気付いていないぞ。

「□□□□□〜」

「□□□□□……□？」

異変に気付いたときにはもう、遅かった。私の目の前には、硬く握られたコブシが迫っていた。

「ハグー!!!」

私の目の前は、真っ暗になった。

カエデ その1

「サイテー！！ おっさん、あんた何者！？ マジ気持ち悪いんですけど」

私は一人で発声練習をしているときに、急にハモってきた気色悪いおっさんをぶん殴った。おっさんは「ハグう！！！」と気味の悪い奇声をあげて、その場に倒れた。

「おっさんとは酷いな。私はまだ28歳の青年だ」

おっさんは頭を抱えながら、ゆっくりと起き上がった。……このおっさん、どこかで見たことあるような……。私はおっさんの顔をマジマジと見つめた。私は記憶の中からこのおっさんの顔を搜した。あと少しで思い出せそうんだけど……。

私はこのおっさんが誰なのかを思い出そうと、おっさんに近づき、さらにマジマジと顔を見つめた。

「ああ！！ 思い出したああ……」

私がそう、叫んだとき。おっさんと私の唇が触れ合った。

ハルカ その2

「はぁー……、やっと、追いついた……」

私は社長さんの後を必死に追いかけて、ようやく浜辺にいる社長さんに追いついた。私はこの胸の中にある感情を社長さんに伝えたくて、呼吸を整えながら言葉を考えた。

社長さんのおかげでアイドルという仕事を好きになれたことを、感謝したい。社長さんとの出会いが私にとってかけがえのないものだったと、知ってほしい。そして、うまく表現できないこの胸のドキドキを伝えたい！

「よし！」

私は呼吸と気持ちを整えて、社長さんのいるテトラポッドの向こう側を覗き込んだ。

「……………ザザア……………」

美しい波の音。唇を重ねあう男女。やけに速く鼓動する心臓。何故か零れ落ちる涙……

気がつくと私は、海と反対方向に走り出していた。

ふけさん その5

私に重いコブシをあびせた少女は、何故かマジマジと私の顔を見
てきた。そして、私に顔を近づけてきた。……これはまさか！？
「キスして欲しい」のサインではなからうか！！　ここは男として
はすすわけにはいかない！

そう思った私は少女の唇に自らの唇を押し当てた。

……もう少し美しい表現のできる接吻をしたかったが、こういっ
た経験の少ない私では、衝突事故のようなキスが限界だった。

「おらあ！！！！　てめえ、このやろっ！」

衝突事故のようなキスのあとにやってきたのは、少女の甘い言葉
ではなく、まさに衝突事故のようなコブシだった。

「はぐっうっ！！」

私は後方に吹き飛ばされ、テトラポッドに頭蓋骨を打ちつけた。

「あんた……私から夢だけじゃなくて、ファーストキスまで奪いや
がって！　社長かなんだか知らないけど、少し偉いからって、人の
大事なものを奪っていいわけ！？　ほんとサイテー！！！！」

コブシの嵐が私を襲う。蹴りの嵐も。そして、そんなコブシと蹴
りの嵐の中、冷たい雨が降ってきた。

「これは暴風雨になりそうだ」

私は、まるで滝のようにぼったんぼったんとたれ落ちる少女の涙を見ながら、そんなことを考えていた。

カエデ その2

「オラオラオラオラ!!」

おっさんを殴っていると、少し気が晴れた。ここ最近、オーディションというオーディションに落ちまくり、少し気持ちが落ち込んでいた。

2ヶ月ほど前に受けたアイドル『カシューナッツ』のオーディションでは、このおっさん社長に邪魔されて落選した。この落選を機に、私は調子を崩し、その後に受けたアイドルオーディションでは1次、2次審査での落選が続いた。

最初のころは落選しても「こんなに魅力的な私を落とすなんて! なんて見る目のないやつらだ!」と強気でいられた。でも、さすがに50回近くオーディションで落とされると、自分はアイドルとしての素質がないのではないかと、かなり気持ちが落ち込んでいた。

「くそ! 社長がなんだ! このやろう!」

私はここ最近オーディションで落とされたのは、この社長が元凶のような気がしてきて、さらに激しくおっさん社長をぶん殴った。

「ま、まってくれ! わ、私は社長じゃないんだ!」

私は思わずコブシを止めた。社長じゃない? どういうこと? 私の思考は停止した。

ふけさん その6

「ま、まってくれ！ わ、私は社長じゃないんだ！」

生命の危険を感じた私は、自分が社長ではないことを正直に話し、謝罪することを決意した。私の誠実な思いが届いたらしく、少女は嵐のようなコブシを抑えてくれた。

「社長じゃないって……じゃあ、あんた誰？」

「申し送れました。私、たなかけいいち田中敬一と申します。皆さんからはよく『ふけさん』と呼ばれます。ご覧のとおり、私とても老けた顔をしておりまして、それでふけさんと呼ばれています。あ、これでもまだ28歳なんです。驚きました？」

「うそ！？ 28歳？ ふけさん？ いや、だから……えっと、あなた、あの芸能プロダクションとは関係のない人なの？」

「はい、そうです。私この町の市役所で働いている、公務員でございます」

「……じゃあ、何で社長だって嘘をついて、あのオーディション会場に潜入したの？」

「おもしろそうだったからです」

「……じゃあ、なんであのオーディションのとき、私を槍玉に挙げて、責めるような発言をしたの？」

「それは……」

私は思わず返答に困った。返答しただいでは、殺される。そう思えるほど、彼女の目は鋭く私の瞳を睨んでいた。私は少女の怒りが少しでも収まるような回答を必死で考えた。

カエデ その3

「き、君以外の人が、目に入らなかったからです」

ふけさんはオドオドとした表情で、あからさまな嘘をついた。

「ぷ、ぷははは！」

私は思わず笑ってしまった。ああ、この人はなんて嘘をつくのがへたくそなんだろう。そう思うと、何だか怒る気も失せ、何もかもがどうでもよく思えてきた。

「ふけさん、あんた金持っている？」

「あ、はい。それなりに。一応社会人なので……」

「よし！ それじゃ、行くよー！」

「え？ ええ？」

私はキョトンとしているふけさんの手を取り、繁華街へと向かった。

ハルカ その3

社長さんのキスシーンを見た私は、無我夢中で街中を走った。

「もげえ！」

そして、こけた。

「イテテテ……」

膝を大きくすりむいた。真紅の血が滲んでいる。痛い……

「うううう……」

痛みを感じた瞬間、瞳から滝のように涙が溢れてきた。

私、なにやってんだろう……

「大丈夫ですか？」

ふと、声のする方を見上げると、目の前には警察官がいた。私は泣き顔を見られなくなかったので、必死に痛みと涙を堪え、笑顔で答えた。

「大丈夫です。おかまいなく」

私は直ぐに身を翻し、警察官から離れようとした。

「ちょ、ちょっとまって！　き、君はあの社長と会いたいんだろ？」

私の足が止まった。

「俺、あ、あの社長と知り合いなんだよ……だから……そ、そうだ！　これ、これ俺の連絡先。もし、社長に会いたいんだったら連絡して！」

そう言つと、警察官は拳動不審な動きで私に紙切れを渡して去つて行つた。社長さんに……もう一度、会える？　私の胸は少し、ときめいた。

ふけさん その7

「あのカエデさん？　もしかして、それ全部買っんですか？」

カエデと名乗る少女は、買い物カゴに服や雑貨をどんどん入れて行く。

「当然よ」

「お金は……」

「は？　あんたが払うに決まっているでしょ」

「でも……」

「何？　あんた私のような可憐な少女の夢とファーストキスを奪っておいて、何様のつもり？」

「……申し訳ありません」

「ほんとうなら、警察に行ってもいいんだよ？　『変態に襲われました！』って泣きながら交番に駆け込んであげようか？」

「……勘弁してください」

「これでチャラにしてあげようっていう私の寛大な心に感謝しなさい。あ！　これもかわいい。買っちゃおうっと！」

「…………グスン（涙）」

私は涙をこらえながら、少女のショッピングに付き合った。

カエデ その4

ショッピング、ランチ、ボーリング、スイーツ、ゲームセンター。
私は日ごろの鬱憤を晴らすように、ふけさんを連れて遊び歩いた。
当然、お金は全てふけさんに払わせた。

「次はカラオケよ！」

「すみません……お金が……」

「そう？　じゃあ、しょうがないわね」

「あきらめてくれるんですか？」

「銀行に行ってから、カラオケに行きましょう」

「……はい」

ふけさんは酷く落ち込んだ表情で銀行へ向かった。

「さてと、まずは何から歌おうかな？」

ふけさんの財布が少しふくらみをとりにどしてから、私達はカラオケ屋に入った。やっぱり、日ごろの鬱憤を晴らすには、歌うのが一番だ。

「恋して〜 ♪ 恋してラブミー ♪」

私は最初から十八番おはじの曲である、アイドル『立ち漕ぎシスターズ』の名曲、『恋してラブミー』を熱唱した。

アイドル研究家 その2

『立ち漕ぎシスターズ』

アイドル界では名の知れたアイドルグループの一つだ。アイドルプロダクション『わっしょい』に所属していた。

メンバーは3人。元気っ子のアミコ。元気っ子のサナエ。そして元気っ子のヒビカ。そう、普通アイドルグループはキャラがかぶらないようにメンバー構成をするのが普通である。元気っ子、おとなしい子、不思議ちゃん、このようにキャラがかぶらないようにするのが一般的なのだ。しかし、立ち漕ぎシスターズはその概念をぶち破り、まさかのキャラかぶりをやってのけ、マンネリ化していたアイドル界に風穴を開けた。

さらに、立ち漕ぎシスターズのすごいところはそのコンセプトにある。立ち漕ぎシスターズのコンセプト、それは

『超ミニスカートをはいてもパンツが見えない、脅威のフトモモ！
！！！！！！！』

……今でもこのコンセプトを聞いたときの衝撃を忘れることができない。まさに青天の霹靂とはこのことだろう。長年アイドルオタクであり、アイドル研究家とまで呼ばれるようになった私ですら、その驚愕のコンセプトに度肝を抜かれた。

『立ち漕ぎシスターズ』は仕事がない時間帯は常に自転車を立ち漕ぎし、フトモモを鍛え上げていた。そして、競輪選手顔負けの分厚いフトモモは、見事に右足と左足の間の隙間を埋め、男子諸君の永遠の憧れであるパンチらを封印してしまった……。

歌はよかった……顔も悪くなかったのに……。

『立ち漕ぎシスターズ』が結成からわずか2年で解散してしまった理由は、おそらく鍛えすぎたフトモモであろう。このアイドル研究家の私が言うのだから間違いない……。

ふけさん その8

「恋して〜 ♪ 恋してラブミー ♪」

数年前、少し話題になったアイドル『立ち漕ぎシスターズ』の代表曲『恋してラブミー』を歌う少女。その姿は、シヨッピングをしているときよりも、ランチで5人前の餃子を食べているときよりも、ボーリングでストライクを出したときよりも、カフェで巨大チョコランマパッフェを食べているときよりも、ゲーセンで昇竜拳を連発しているときよりも、輝いていた。

「恋の隙間は開けたらダメよ〜 ♪ フトモモ閉めて逃がさない〜 ♪」

まるで別人と思えるほど、少女はキラキラしていた。そのキラキラは、けして眩しいキラキラじゃなくて、触れたら壊れてしまいそうな儚いキラキラだった。「完全」にはない、「不完全」だからこそその魅力。彼女の歌う姿には、それがあつた。

「すごい！　すごいよー！！」

私は彼女が歌い終わると同時に立ち上がり、無意識のうちに拍手をしていた。私はこのとき初めて、「アイドル」というものを理解した。

アイドルは人に勇気を与える仕事でもなければ、ましてや憩いを届ける仕事でもない。がんばっている自分を見せ付けることで、あがいている自分を見せることで、「この子のために何かしてあげたい！」この子のために何か自分にできることはないだろうか？」そ

う、ファンに思わせる仕事なんだ。

自分以外の誰かのために生きることのスバラシさを伝える仕事、それが『アイドル』なんだ……

カエデ その5

「すごい！　すごいよー！！」

予想外のふけさんの反応に、私は驚いた。

「ふん！　これくらい序の口よ。私の魅力はまだまだこんなもんじやないんだから！」

私は少し照れながらも、強気な口調で応えた。

「他に歌える曲もあるんだろ？　ぜひ、聞かせておくれよ！」

「そ、そう？　そこまで言われちゃ、しょうがないわね」

普段一人で歌の練習をしている私にとって、家族以外の人にこれほどの高評価をもらったのは初めてで、正直、嬉しかった。

ああ、やっぱりアイドルという仕事をあきらめたくない。

私はこのとき強く思った。たった一人でも、こんなに目を輝かせて私の歌う姿を応援してくれる人がいてくれたら、それだけで本望だ。それだけで、アイドルを目指す価値がある。

「イチゴの馬車で、潮干狩り〜」

私はいつもよりも3倍くらい高いテンションで、アイドル『水玉ポニーイチゴ姫』のサードシングルである『イチゴの馬車で潮干狩

り
『を熱唱した。

アイドル研究家 その3

『水玉ポニーイチゴ姫』

アイドル界では名の知れたアイドルだ。当時、アイドルプロダクション『わっしょい』所属。

メンバーは、『みゆみゆ』と呼ばれる小柄なアイドルと『ぽにゅー』と呼ばれる馬の着ぐるみを着た人。

キャッチフレーズは

『イチゴの国からこんにゅちわ。うっかり人間界にきちゃいましたや、テヘ！』

……そう、ガツチガチの不思議ちゃんアイドル。それが『水玉ポニーイチゴ姫』なのだ！！ みゆみゆは身長148センチと小柄で、顔も童顔。胸はAカップ。まさに、ロリの神様！ はふっ！！ は、鼻血が！ ……取り乱して申し訳ない、話を続けよう。

例え容姿が整っていて、不思議ちゃんという特徴があっても、今のアイドル界で活躍するのは難しい。それほど、今のアイドル界は厳しいのだ。それは『水玉ポニーイチゴ姫』も同じだった。ファーストシングル、セカンドシングルと泣かず飛ばず。全く売れなかった。曲もよくなかったし、みゆみゆの歌唱力にも些か問題はあった。さらに、途中で入る「ヒヒーン！」というポニユーの泣き声が、非常に邪魔だった。

そして、テレビ放送にも問題があった。視聴者はかわいらしいみ

ゆみゆを見たいのに、ポニーがみゆみゆの周りで奇妙なダンスを踊っているため、「みゆみゆに集中することができない!」、と苦情が殺到した。

そんな『水玉ポニーイチゴ姫』だが、サードシングル『イチゴの馬車で潮干狩り』で一氣にブレイクすることとなる。

歌はファーストシングル、セカンドシングルと全く同じ路線で、不思議ちゃんを前面に出した曲だったし、みゆみゆの歌唱力が上がったわけでもなかった。

では、なぜ売れたのか? そう、ポニーが急にブレイクダンスをし始めたのだ! ！それが話題になり、一氣に『水玉ポニーイチゴ姫』はブレイクしたのだった! ……長年アイドル研究家をやっているが、アイドルというのはほんとにわからん。なんで、馬の着ぐるみがブレイクダンスをしただけで売れるんだ!? わからん……。ってか、絶対馬の着ぐるみの中身変わっているだろ! ……はあ、まだまだ、研究が必要だな。

ちなみに余談だが、みゆみゆはその後、年齢を誤魔化していたことが発覚(当時18歳といわれていたが、デビューしたときにはすでに26歳だった)。さらに、タバコを吸っているところや、路上で男とキスしているところを週刊誌に撮られ、酷いバッシングを浴びた。最終的には馬の着ぐるみを着ていた男(ブレイクダンスをしていた方)とできちゃった結婚をし、アイドル業界から去って行った……………アイドルのその後なんて……………その後なんて……………

アイドル研究家とは、時にアイドルの裏側を見なければいけない、

つらい仕事だなあ。私は改めてそう思った。アイドルの表面だけを見て、ただ喜んでいたアイドルオタクにはもう、戻れないのだなあ。私は少しセンチメンタルになりながら、頼まれたコラムの記事を書き上げた。

ふけさん その9

少女はカラオケ店に入ってから延長に延長を繰り返して、ついには営業時間ギリギリまで一度もマイクを離すことはなかった。

普通の人だったら途中で嫌になるのかもしれないけれど、私は終始興奮し、楽しんでいた。少女の歌う姿はいつでも輝いていて、数十時間見続けても足りないくらいだった。

「……カエデさん、君はなんでアイドルになろうと思ったの？」

少女の歌を聞きながら、私はあることを考えていた。

「君はどんなアイドルになりたいの？」

そう、それは短絡的で至極当然な思考の流れ。

「実は提案があるんだけど……」

こんなに輝いている少女を、こんなところで埋もれさせておくわけにはいかない。それは、人類にとって多大な損失だ。

「私が、君を、アイドルにする！」

私は少女のために、この身を捧げることを決意した。

警察官川島 その2

「あ、ハルカさん。この前の『カシユーナッツ』のライブ行きましたよ！ やっぱりハルカさんが一番輝いていました」

「ありがとうございます」

ハルカちゃんにはこやかな顔で俺の話聞いていた。

「いやー、でもまさかほんとにハルカさんが僕に連絡くれるなんて……びっくりだなあ。まさかアイドルとこうやって食事ができるなんて、夢みたいですよ」

ハルカちゃんは無言で微笑み、たらこパスタを器用にフォークで巻き取り、品の感じられる所作で口へと運んだ。

「ところで、川島さんは社長さんとお知り合いだということでしたか……」

ハルカちゃんが「川島さん」と俺の苗字を口にした。それはつまり、彼女が俺という存在を認識したということだ。そう思うと無性に嬉しくて、俺は舞い上がり、思わず嘘をついた。

「そ、そうなんですよ！ やつとは大学時代からの友人でね。いやー、ほんとあいつにはいろいろとやってやったんですよ……」

ハルカちゃんの目がキョトンとしているのに気がつき、俺は思わず言葉の語尾を濁した。

「え？ 川島さんはいくつなのですか？ とても社長さんと同じ年代の人とは思えないのですが……」

そうか、ハルカちゃんはそのへんなおじさんが実は28歳だっていうことを知らないんだ。

「……驚くかも知れないけど、あの社長、まだ28歳なんだよ」「うそ……！」

ハルカちゃんは店中に響き渡るような声を発した。よほど信じられなかったのだろう。完全に瞳孔が見開いていた。

「す、すいません……」

ハルカちゃんは自分でも信じられないくらいの声を出してしまったことを恥らい、顔を真っ赤にして小さくなった。ああ、なんてかわいいんだろう……

「わ、私、社長さんに会いたいです。お願いします。社長さんに会わせてください」

「う、うん。わかったよ……」

思わず了承してしまったが、困った。実際、変なおじさんとは友達でもなんでもないんだから。さて、どうしようか……。

俺はすっかり冷めてしまったボンゴレソースパスタを口に入れながら思案した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6779x/>

カシューナッツはお好きでしょうか？

2011年10月21日14時04分発行